専大校友を訪ねて 日本で10人といない刀身彫刻師 橋本琇巴さん（本名・太郎 昭和47・経済）

校友の吉田弘さん（昭56文）が主査を務める埼玉県の狭山市立博物館で、橋本さんの刀身彫刻の作品展示と実演があると聞き、訪ねた。刀身彫刻は、刀に文字や図を鏨で彫るもので、古代から継承されている伝統工芸だ。

橋本さんは中大付属高校時代、陸上の選手として活躍。体を壊し、1浪して専大に入学したが「講義の合間にキャンパス周辺を歩き回り」独りで絵を描いていた。「大学は私にとって、漠然とした不安の中で『自分探し』をするフィールドでもあった」という。やがて「芸術的な道に進みたい」欲求に駆られ、卒業後、絵画や彫刻の研究所に通いながら「アングラ劇団の舞台づくりや、撮影所での怪獣映画の裏方などに従事して」自分探しの旅を続けた。

卒業して10年目の昭和57年、知人の紹介で「刀剣研究家の先生に作品を見てもらい」その機縁で刀身彫刻の大家、苔口仙琇師の内弟子になることが出来た。「偶然が人生を変えた」という。だが、それからはまさに「骨を削って彫りをする」難行苦行の日々が続く。それに耐え、ようやく5年後の昭和62年、師の許しで初めて槍に草倶利迦羅を、脇差表裏に火炎不動明王と瓜付剣を彫り、「太」という銘で出品。刀身彫刻の部で優秀賞を受賞した。以後毎年入賞を重ねていく。平成3年に師から「琇巴」の銘を与えられた。大学を卒業して20年の歳月。感無量だった。

現在まで依頼を受け、刀や脇差、短刀など約100振を彫っている。またロンドンや国内各地で実演会を開き、刀身彫刻の普及に努めている。

「引き受けてから下絵を描き、彫り上げるまで最低半年は費やす。失敗は許されない。刀に鏨を入れたときの恐ろしさと緊張に耐え、とにかく無心になり、持てる目いっぱいの力を出し切ることだけ考えています」という。

【ニュース専修1月号11面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.